



第27回文化講演会に参加して

今年の中原寺文化講演会は、10月24日、向野幾世先生をお招きして開催されました。講題は、「お母さん ほくが生まれてごめんない」でした。先生は障害児教育に携わっていらっしゃる。

篤信の門徒であったお父上も障害をお持ちで、先生の表現をお借りしますと、大学卒業後直ちに“自然に命の使い方(使命)として障害を持った子と一緒に生きていくんだ”と決められたとのこと。またこの講題と同じ名前のご本をお書きになり、当日皆さんに配って欲しいと50冊寄贈されたのですが、これを皆さんに買って頂き売り上げは全額寄付することになりました。

この講題の元となる詩は、丁度1年前の報恩講で前住職が紹介され、この壮年会だよりに掲載しましたので、今回お話

されたある少女の詩を載せたいと思います。彼女はボランティアのある医学生に恋心を懐き、その気持ちをうたいました。悲しいしかし美しい詩だと思います。

18歳の愛

眠れない夜が続きます あなたを愛する心いっぱいなのに 幼すぎますか 私には 精いっぱいの愛です それは 愛とは言えないから ただあこがれと呼ぶのでしょうか 18歳の愛 じゃいけませんか からだの不自由なものの愛は いけませんか ぜいたくですか私には 精いっぱいの愛です それは愛とは言えないから ただあこがれと呼ぶのでしょうか

「やさしさこそが 大切に 悲しさこそが 美しい」、お話を拝聴して涙腺のバルブが閉まらなくなりました。深い感銘を受けたひとときでした。尚、先生が講演の中で歌われた、「お母さん ほくが生まれてごめんない」(作曲：遠藤実、歌唱：森昌子)は、youtubeで聞くことができます。

報恩講に出席して

11月20・21日報恩講法要が行われ参加し、お手伝いをしました。お連夜のコンサートは、最勝寺(浦和)の坊守さん率いる女声コーラスで、いろいろな讃仏歌を拝聴しました。最後に私たち一緒に「もみじ」と「ふるさと」を歌いましたが、「もみじ」は客席の右と左で輪唱をして楽しい一時でした。コーラスの方々は初夜礼賛の法要にも参加下さり、南無阿弥陀仏の念仏の音がひととき大きく、仏の実りを感じました。

法話は、講題「念仏と信心」藤實無極師(滋賀県)で、お連夜、日中、ご満座法要まで3回に分けて念仏と信心という真宗の核心をお話になりました。

以下概要です
『近頃は浄土真宗と浄土宗との区別が曖昧になっておる。真宗にとって無量寿経こそが大事な経である。この上巻は真=念仏=仏の世界を現わしており、下巻は實=信心=こちらの世界を現わしている。真宗は体失往生(死後)でなく即得往生(生きている間)であり、身体が死ぬときに他の宗派のようにご来迎は来ない。回向は仏のなされることで、私どもは不回向であるから、念仏をして死者を送る訳でない。』

雑行自力の念仏は一番親鸞さんが嫌うところである。南無阿弥陀仏は御恩報謝の念仏で、阿弥陀様の呼び声に対する返事である。善導大師が実践行の五正行の第四番目の称

名念仏を第一と言われ、今月の「宿縁」にきちんと述べられておる。正定聚の位は信心が定まった不退転の境地である。初歓喜と言われ、歓びを伴う素晴らしい境地であり、即ち仏法を聴くことは感動・感激することにほかならない。』

説法というのは、七高僧、親鸞さん、蓮如さん、經典からの引用で、すてきな言葉が沢山出て、有難いお話を聴いたような気持ちになります。しかし、自分のような人間の口から何故念仏が漏れるのか?が一番知りたいところかと思えます。当たり前のことが当たり前でない、有難うということがどんなに有ることが難しいのか。

そして自分の身がどんなに恥ずかしものかを心で感じなければ納得しないわけで、その気づきを助けてあげることが必要でないかと思っています。そしてある日突然、仏の存在の有難さに気が付いたときに、親鸞さんのいう横超なのかと。

書店で『寺院消滅』という本が平積みになっています。解説には「経営の危機に瀕するお寺と、お寺やお墓はもういらぬと言う現代人。この問題の根底には、人々のお寺に対する不信感が横たわっている。僧侶は、宗教者としての役割を本当に果たしてきたのか。檀家や現代人が求める“宗教”のあり方に応えることができているのか」とあります。

お寺と人々を繋ぐものは、お墓ではなく法だと思っています。そして説法が中心になるところだと思います。



今回の法話では、60代・70代・80代の人生の後編に入った人々の元気な過ごし方に関する森村誠一の言葉を多数引用されました。また人生を飛行機に例えて、これからは着陸するだけだから、出来るだけゆっくり軟着陸しましょうと締めくくられました。小生が感じたことに代えて、金子大栄先生の言葉と、若くして亡くなられた、本願寺派僧侶住宅顕信さんのお俳句3句を揚げます。

❖花びらは散っても花は散らない 形は減びても人は死なぬ
❖たいくつな病室に窓の雨をいただく 流れにさからうまい 歩けるだけ歩く
❖念仏の口から 愚痴ゆうてた (越田 修二郎 記)

感話 シリーズ-17

千葉組仏教壮年会研修一泊旅行に参加して



秋のお彼岸法要を9月23日に控えた、9月14日～15日『親鸞聖人のふるさとを訪ねて』“7ヶ寺参拝の旅”に参加しました。

親鸞聖人が関東の拠点とされた稲田にお移りになり、関東一円にお念仏を広められた茨城・栃木の7ヶ寺への参拝予定でしたが、先の台風18号と豪雨で被害が甚大でしたので、初日は2ヶ寺を遠慮し、下妻市の光明寺(太谷派)へ参拝、ご住職よりお話を頂きました。

開祖は明空房であり綽空(親鸞聖人の旧名)の空の一字を頂き、付けられたとお話になりました。初日の参拝は1ヶ寺のみで、益子に移動、外池酒造店へ立ち寄り、精米から清酒の出来上がるまでの説明を受けました。私も清酒1本購入しました。次の益子共販センターで当日の参拝・見学は終了し、益子温泉ホテルへ。温泉のいいお湯で一日の疲れが取れ、癒やされた後のお酒を美味しく頂きました。

二日目は、まず大宮町の法専寺(太谷派)の参拝。開祖は明法房で1225年(嘉禄元年)に一字を建立、法統は第二世明教房を経て現在29世に及び、780余年の歴史があるとお話になりました。

次に山方町の本泉寺(本願寺派)に参拝。開祖は親鸞聖人の24輩の唯円房であり、唯円房の俗称は鳥喰六兵衛であるとの事で、天正18年に江戸の佐竹氏との合戦での消失で下総古河へ移り、文禄8年に鳥喰に戻るが雷火でまた消失、寛文4年現地に再建、現在に至るとのことでした。

袋田の滝のレストランで昼食を頂き滝を見物し、太子町の法龍寺(太谷派)へ。開祖は親鸞聖人の孫で本願寺第二代の如信上人であり、1300年(正安2年)この地の草庵にて66歳で亡くなられたとのご説明でした。

最後の参拝先は、昨年中原寺の報恩講にお越し頂き法話をされた池田行信師のお寺、栃木県那珂川町の慈願寺(本願寺派)で暖かく迎えて頂きました。

今回の研修旅行は歴史ある寺院であり、色々勉強させて頂きありがとうございました。参加者は45名、当寺からは壮年会4名・婦人会8名の参加でした。合掌

(村田 太喜夫 記)

